

TG 大学軟式野球部の東海リーグ優勝の背景

—特別活動および部活動で培われた学生の

「生きる力」に着目して—

小田佳子*・南辰之介**・榊原兄也***・黒須雅弘*・村松常司*

キーワード：部活動、特別活動、軟式野球、コーチング、生きる力

1. はじめに

スポーツは「人類が生み出した貴重な文化であり、自発的な運動の楽しみを基調とし、障害の有無や年齢、男女の違いを超えて、人々が運動の喜びを分かち合い、感動を共有し、絆を深めることを可能にする。さらに、次代を担う青少年の生きる力を育むとともに、他者への思いやりや協同する精神、公正さや規律を尊ぶ人格を形成する」¹⁾と、文部科学省がスポーツの価値を明確に示し、学校教育の中に積極的に導入してきた。特に、我が国には学校教育の一環として運動部活動が存在する。中学校・高等学校における運動部活動は、学校教育の一環として、スポーツに興味と関心をもつ同好の生徒の自主的・自発的な参加により、顧問の教員をはじめとした関係者の取組や指導の下に運動やスポーツを行うものであり、各学校で多様な活動が行われ、我が国独自の発展を遂げてきた²⁾。

こうした運動部活動現場で、平成24年に顧問教員の体罰を背景として大阪市立桜宮高校バスケットボール部員が自ら命を絶つという痛ましい事件が発生した。この事件以降も運動部活動における指導者による体罰の問題が繰り返し報告され、スポーツの価値への棄損が露呈している状況を鑑み、平成25年に文部科学省で「部活動での指導のガイドライン」を含めた調査研究報告書がまとめられた。

部活動については、平成20年に中学校、平成21年に高等学校の学習指導要領改訂で教育課程との関連が明記されたことが初めてである。この部活動と教育課程の関連に関する学習指導要領内での言及も、遅きに期していることは言うまでもない。関³⁾はさらに厳しく「これは法的・制度的な問題点を解決しないままでの部活動の強化策（いわば学校と地域社会への丸投げ）であり、文科省の姿勢には若干疑問なしとしない。」と言及している。このように、学習指導要領上のブレを始めとして、部活動に対して軸足が定まらないことは、学校現場に諸々の問題を引き起こしている³⁾。

平成24年度から実施されている中学校学習指導要領の総則⁴⁾には、部活動の意義や留意点について、「スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」と規定されている。同様に、平成25年度から実施されている新高等学校学習指導要領の総則⁵⁾にも記載されている。

学習指導要領における部活動の位置付けについて振り返ると、中学・高校ともに、平成元年の学習指導要領改訂までは、特別活動の内容として週1回行う「クラブ活動」が位置付けられていた。また、同年の改訂で、中学・高校ともに「クラブ活動」の時間を授業に組み込まなくても教育課程外活動の部活

* 東海学園大学スポーツ健康科学部、** 東海学園大学卒業生現石川県立ろう学校、

*** 東海学園大学卒業生現碧海信用金庫

動をもって代替できる「部活動代替措置」が設けられた。その後、平成 10 年改訂の中学校および平成 11 年改訂の高等学校学習指導要領で「クラブ活動」が廃止された。その背景としては、従来の「部活動代替措置」によって「部活動」が盛んになってきたことや、地域の青少年団体やスポーツクラブなどに参加する生徒が増えてきたことなどが挙げられている³⁾。

上記のように、「部活動」がこれまでの学習指導要領上の位置づけの中でも最も関連する教育課程は「特別活動」になるであろう。そこで、特別活動の目標を確認する。特別活動の目標は、高等学校学習指導要領⁶⁾では「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養うことである」と示されている。この特別活動の目標は、ホームルーム活動、生徒会活動及び学校行事の 3 つの内容を総括する目標であるとする。よりよい人間関係の構築に配慮し、生徒の「生きる力」の育成を意識した内容が示されている。

2. 研究目的

そこで本報告では、「特別活動」および「部活動」で培われた学生の「生きる力」に着目しつつ、TG 大学軟式野球部の東海リーグ優勝の背景を明確にすることを目的とする。

TG 大学は 5 学部体制であり、中でもスポーツ健康科学部を中心として、運動部活動が活発に展開されている。硬式野球部やサッカー部をはじめ、女子ソフトボール、女子バスケット、硬式テニスなどは強化指定部とされ、学生は部活動推薦での入学が可能であり、実績のある監督（指導者）の下、高い目的意識を持って日々の部活動に取り組んでいる。他方、軟式野球部は指導者が不在であり、学生主体の部活動である。そのため、学生選手一人ひとりの能力や高校までの競技実績は全国大会出場等、優秀な成績を収めている者も在籍してはいるものの、チームとしてのまとまりや部活動に対する意識が低く、いわゆる「硬式崩れ」と称される野球部員が在籍している。2014 年までの東海リーグでの実績は、10 チーム中 4 位、5 位であった。とりわけ TG 大学が所属する東海リーグには C 大学の存在が大きい。C 大学は全国優勝の実績もあり、監督（指導者）の下、学生選手のセレクションも入試で実施され、全国でも有数の軟式野球強豪校として名を轟かせていた。そのため、TG 大学の全国大会への道は C 大学が非常に高い壁となっていた。

本報告は、2014 年度から 2015 年度にかけて新チームに移行する際に、対象となる学生が主体となって本部活動を改革し、C 大学に勝ち全国大会出場を果たすという目標を掲げたことが始まりとなる。対象となった学生らは 2 年次からチームの中心メンバーとなり、部活動の組織改革を行い、大学でのスポーツ科学の学修を適時応用し、スポーツ指導法やコーチングおよびマネジメントなどの様々な知識を生かし、全く無名だった TG 大学が 2016 年度全日本学生軟式野球大会において初優勝を成し遂げた。

その実績を踏まえ、本報告では、その優勝の背景を部活動運営（学生監督によるコーチング）および公式戦での得失点率から明らかにする。また、学生のみで独自に展開された部活動運営が、高等学校までの教育活動全般、或いは、特に特別活動および部活動で培われてきた「生きる力」と大学でのスポーツ科学の学修の融合であることを論理づけたい。

3. 研究方法

（1）監督とチーム構成の変遷

2014 年から 2016 年までの各学生監督 3 名（それぞれ S 監督、K 監督、I 監督とする）と部員構成を部員登録名簿とウェブ上の情報から抽出し表 1 にまとめた。

(2) 監督別チーム課題と練習内容

1) チーム課題の設定

2014年から16年までの3年間の各学生監督がミーティングで設定したチーム課題等は、各監督へのインタビュー等から抽出し表2にまとめた。

2) 練習内容

それぞれの学生監督が実施してきた練習内容については、練習日誌および学生監督へのインタビューから表3にまとめた。

(3) 公式戦での得失点パターン

2014年から2016年までの3年間のTG大学軟式野球部の春季リーグ戦の得失点パターンをスコアブックから算出した。

得失点パターンの算出方法は、リーグ戦全試合の総得点、総失点を抽出した後、それぞれ得失点につながった要因を以下の3パターンに分類し、①ヒット、②内野ゴロ、③エラーそれぞれの割合を算出した。得点時は、攻撃での成績、失点時は守備での成績とした。

- ①ヒット：走者が打者のヒット（内野安打、二塁打、三塁打）でホームインしたものと、打者が本塁打を打って自らホームインしたものとする。これは攻撃面、守備面同様とする。
- ②内野ゴロ：走者が打者の内野ゴロの間にホームインし、打者走者はアウトとなったものとする。ここでの内野ゴロはゴロ打ちに限らず、得失点になった内野ゴロすべてを表す。

※軟式野球では硬式野球と違い、ゴム製のボールを最大限に生かすために、「ゴロ打ち（叩き）」というバッティングがある。これは硬式ボールでは軟式ボールほどは弾まないが、軟式ボールは高く弾むことが多い。そのため、ボールが高く弾んでいる間に走者がホームインするという戦術が多用される。スクイズバントとは違い、走者がスタートを切らない分、失敗して走者がアウトになる確率がほとんどないのが大きな利点である。しかし逆に、スタートを切らない分、ボールが高く弾まなかったりするとアウトになり、ホームインできないことも多い。

- ③エラー：走者が守備側のエラーによりホームインしたものとする。その失策は、投手のワイルドピッチや捕手のパスボール、野手の捕球ミスや悪送球、内外野の連係ミスなどをすべて含んだものとする。

4. 結果と考察

(1) 監督とチーム構成の変遷

表1に、2014年から16年までの学年別部員数の変遷を示した。

表1. 監督と学年別部員数の変遷

年度	監督	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
2014年	S監督	14人	<u>14人</u>	7人	1人	36人
2015年	K監督	14人	13人	<u>14人</u>	1人	42人
2016年	I監督	23人	12人	13人	<u>6人</u>	54人

※下線部は、対象学生らが在籍していた学年である。

2014年の部員数36名から16年の部員数54名まで、3年間に渡り部員数が増加していた。その主な理由は、2014年以降、部員の学年が上がっても部活動をやめずに継続する傾向が明らかになったことと、16年にリーグ優勝したために、この年の新入部員が増加したことが要因と推察される。

2014年のS監督（当時3年）はS県私立高校時代に、春の第83回選抜高校野球大会に出場し左翼手で活躍していた。S監督が学生監督を務めたときの部員構成は、部員36名とマネージャー4名であった。

2015年のK監督（当時3年）はA県私立高校で、2年次から野球部エースを務めていた。K監督が学生監督を務めたときの部員構成は、部員42名とマネージャー5名であった。

2016年のI監督（現3年）はS監督と同校で正捕手として活躍した。また、2016年大学軟式野球日本代表に選出されている。I監督が学生監督を務めたときの部員構成は、部員54名とマネージャー5名であった。

（2）監督別チーム課題と練習内容

1）チーム課題の設定

各監督別に設定したチーム課題を表2に示した。チーム課題については、2015年から対象学生らがチームの中心となり2014年のリーグ戦結果から【部活動の目的】と【チーム方針】を明確にした。加えて【チーム目標】を定めた上で、投手課題・守備課題を設定した。2016年にはさらに攻撃課題を設定した。

表2. 監督別チーム課題

監督別のチーム課題の変遷	大会結果	対象学生
S監督時（2014年） ・部として明確な目標がなく、チーム目標や課題を設けていなかった。 チームとしては、全員が野球を楽しんでいた。	・春季リーグ4位 ・秋季リーグ3位	2年次
K監督時（2015年） 【部活動の目的】 ・社会に出て通用する人間の育成 【チーム方針】 ・日本一野球を楽しむチームをモットーに、バッテリー（投手、捕手）を中心とした守備から攻撃の流れを作る。その理由としては、個々の打力は全体的に高かったため、0で抑えることで勝てると思った。 【チーム目標】…1対0で勝利するチーム ・投手課題…四死球を減らすための制球力の向上 ・守備課題…エラーを減らすための守備力の向上	・春季リーグ2位 ・秋季リーグ2位 →西日本大会出場 (初戦敗退)	3年次
I監督時（2016年） 【部活動の目的】 ・社会に出て通用する人間の育成 【チーム方針】 ・2015年同様、日本一野球を楽しむチームをモットーに、「勝ちにこだわる野球」を追求した。バッテリーを守備の柱とし、監督の采配として打力より守備力を重視した。個々の打力が昨年と比べると低かったため、走塁に力を入れる。ヒット0でも盗塁や進塁打で得点を奪うことを意識した。 【チーム目標】…1対0で勝利するチーム ・投手課題…四死球を減らすための制球力の向上 ・守備課題…エラーを減らすための守備力の向上 ・攻撃課題…0ヒットで1点をとる攻撃	・春季リーグ1位 →全国大会優勝 ・秋季リーグ2位 →西日本大会出場 (ベスト16)	4年次

S監督(2014年)までは、部として明確な目標がなかった。チームとしての目標や課題がないため、リーグ戦では強豪校に勝つことはなかったが、全員が野球を楽しんでいた。この時、対象学生らは2年生であり、既に試合に出場していた。

K監督時(2015年)には、新チーム発足後すぐに【部活動の目的】として「社会に出て通用する人間の育成」を掲げた。これは監督、主将、学年関係なく一人ひとりが練習や試合から感じたこと、思ったことを全員の前で自らの言葉で伝えるようにした結果、全員の目的を掲げることになった。

【チーム方針】では「日本一野球を楽しむチーム」をモットーに、前年度から経験豊富なバッテリー(投手・捕手)を中心とした守備から攻撃の流れを作った。その理由として、個々の打力は例年に比べ高かったため、0点に抑えることができれば勝算があると考えたからだ。

【チーム目標】は「1対0で勝利するチーム」であり、その目標を達成するための投手課題と守備課題を設定した。投手課題は四死球を減らすための制球力の向上を定め、守備課題はエラーを減らすための守備力の向上を設定した。対象学生らが3年生のこの年は、春季リーグ2位、秋季リーグ2位の結果を残し、秋季リーグ2位通過で西日本大会に出場した。

I監督時(2016年)には、【部活動の目的】を前年同様「社会に出て通用する人間の育成」を掲げた。【チーム方針】では「日本一野球を楽しむチーム」をモットーに、さらに「勝ちにこだわる野球」を追求した。前年同様、バッテリーを守備の柱とし、打力より守備力を重視する監督の采配があった。それは個々の打力が前年に比べると低かったためである。そのためヒットが打てなくても得点が奪えるよう、盗塁などの走塁練習や、進塁打などの小技に力を入れた。

【チーム目標】は前年同様であり、投手課題、守備課題を継続して行った。さらに、それらに加えて「ヒット0本で1点をとる」という攻撃課題も設定した。

対象学生らが4年生であるこの年に、春季東海リーグで優勝し、最終的には全国制覇まで成し遂げた。秋季リーグは2位通過で西日本大会に出場したが、2回戦敗退であった。

これらの結果からも明らかなように、対象学生らの学年が上がるとともに、チーム成績が上がっており、この学年がチームを大きく変えてきたといえる。また、表1からも明らかなようにチームの課題が明確になるとともに部員数の増加がみられ、チームとして練習への取り組み姿勢が変化し、選手のモチベーション向上にもつながったことが、結果的にチーム成績の向上につながったと推察できる。

2) 練習内容

監督別練習内容の変遷については表3に示した。

練習頻度は週2日(火曜日、水曜日)を基本とし、長期休暇は週3日(火曜日、水曜日、木曜日)行った。練習場所はT大学の第2グラウンドで週1回、その他は近隣のM球場、S運動公園であった。T大学の第2グラウンド以外は、月額2千円の部費で借用し練習会場を確保していた。M球場は1時間約6千円、照明代は1時間約1万円であった。

表3. 監督別練習内容の変遷

	2014 年	2015 年	2016 年
	S 監督	K 監督	I 監督
個人アップ	○	×	×
全体アップ	×	○	○
キャッチボール	○	○	○
全体ノック	○	○	○
FB ^{※1}	○	○	○
SN ^{※2}	○	○	○
バント練習	×	○	○
NG ノック ^{※3}	×	○	○
KB ^{※4}	○	○	○
GG ^{※5}	×	×	○
走塁練習	×	○	○
紅白戦	×	○	○

※1 FB (フリーバッティング)：二か所でピッチャーが軽く投げた球を打ち返す練習。
 ※2 SN (シートノック)：ダイヤモンドグラウンドを使い実戦に近いノック (試合前ノックと同じ)。
 ※3 NG ノック (内野・外野別ノック)：内野はダイヤモンドを使いノック (ダイヤモンドとはベース内の四角形のこと)。外野は一か所に集まりサイドからノックを打ってもらう。
 ※4 KB (ケースバッティング)：ランナーやアウトカウントなど状況を設定し、試合により近い感覚での練習。
 ※5 GG (ゴロゴロ練習)：ランナー3塁でバッターは内野ゴロを打つ。その間に3塁ランナーはホームに帰還できるようにスタート、スライディングの練習をする。また、バッターは高く跳ねる内野ゴロを打つ練習をする。

表3に示されたように、2014年から2016年を通してチーム課題に合わせた練習メニューが増加している。2016年にはチーム課題である「ノーヒットでの得点」のために過去には無かったゴロゴロ練習が取り入れられた。これらは各監督が目指したチーム課題に合わせ、練習メニューを工夫し、考案した結果である。大会成績からも明らかなように、練習メニューの幅が増えたことによってチーム力が向上し、チーム成績も上がった。

チームスポーツとして、2014年までは個人のレベルアップのみだったが、2015年からは全体のレベルアップにつなげるよう、チームとして活動しているのだという意識付けがなされ、チーム改革が始まっている。

技術面でいえば、2016年からゴロゴロ練習を取り入れ、その結果として後述するように内野ゴロでの得点率が上がり、得点力向上に繋がっている。また、2015年には部員数が増えたことから紅白戦ができるようになり、対外試合以外で実戦形式の練習ができる環境になった。

過去3年間共通して行われてきた練習メニューであるものに関しては、「打つ」「守る」という野球の基本的動作であり、どのようなチームスタイルにも必要不可欠な練習である。

2014年の練習はワンパターンで成長を感じない日々だったが、それぞれの監督が決めたチーム課題に合わせた練習メニューを増やし、練習内容に含まれる意味を理解し行うことによって、日々の練習に充実感と達成感を感じるようになったと、対象学生らはコメントした。また、各監督は日々の練習メニューを考えることに苦労はしたが、学生監督を経験し自ら考えたメニューで練習し、大会で結果を残したときには、選手とはまた違った喜びを実感していた。

3) 得失点パターン

a) 2014年春季リーグ (S監督)

2014年春季リーグの得失点パターンを図1に、加えて表1-1と表1-2を示した。

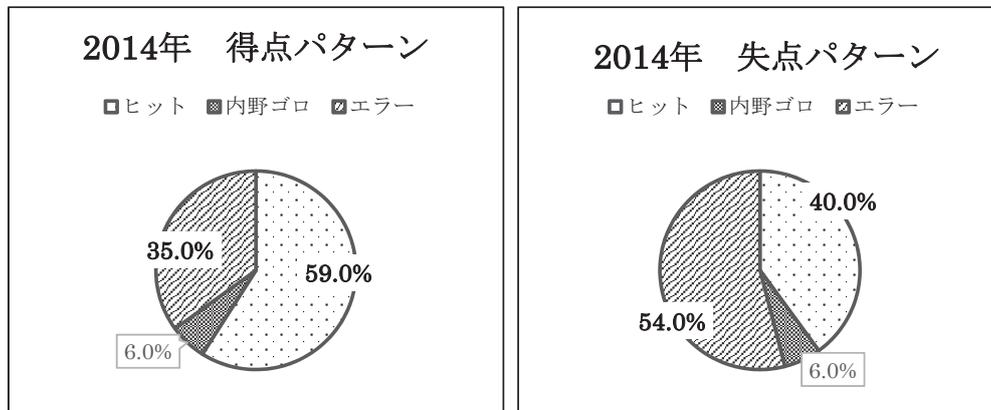


図1. 2014年春季リーグの得失点パターン (全13試合)

表1-1. 得失点要因の実数 (2014)

2014年 (13試合)	ヒット	内野ゴロ	エラー
得点	27本	3個	16個
失点	19本	3個	26個

表1-2. 投手・野手別の失点要因 (2014)

2014年 (13試合)	総数	1試合平均
投手 (四死球)	89個	6.8個
野手 (エラー)	49個	3.7個

図1の得点パターンをみると、ヒットでの得点が59.0%と6割近くを占めている。また、失点パターンをみると、エラーによる失点が54.0%であった。さらに表1-2の投手成績をみると、四死球が1試合平均6.8個と非常に多く、加えてエラーが1試合平均3.7個と多いことから、ヒットを打たれなくても失点してしまうケースが多いことが分かった。以上の結果から、どのようなチームスタイルで戦うのかが明確になっていないことが、勝てない要因であると推察された。ただ単純に打って、守って、走ってとただ「野球」をやっているだけであり、戦術や練習メニューなどを考えずに活動してきた結果が、そのまま試合成績につながっていた。逆に捉えれば、自軍のミスでの失点が減り、このままのヒットの量産が期待される得点力があれば勝てるチームに変身することが期待された。

b) 2015 年 春季リーグ (K 監督)

2015 年春季リーグの得失点パターンを図 2 に、加えて表 2-1 と表 2-2 を示した。

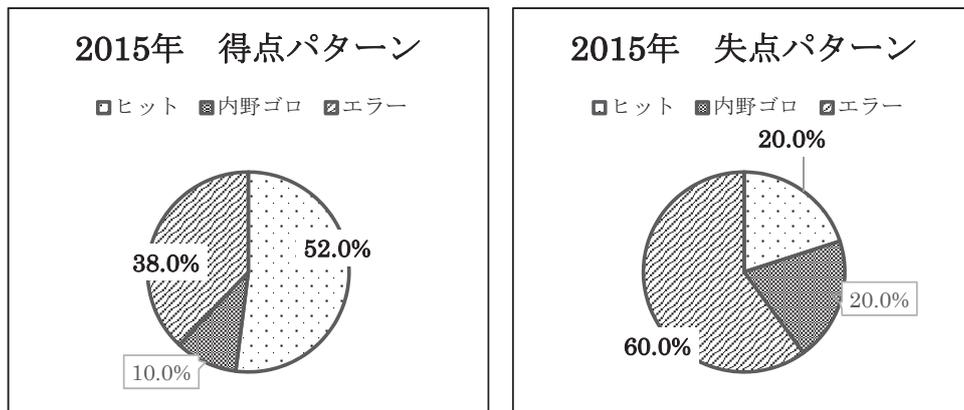


図 2. 2015 年春季リーグの得失点パターン (全 7 試合)

表 2-1. 得失点要因の実数 (2015)

2015 年	ヒット	内野ゴロ	エラー
得点	21 本	4 個	15 個
失点	1 本	1 個	3 個

表 2-2. 投手・野手別の失点要因 (2015)

2015 年 (7 試合)	総数	1 試合平均
投手 (四死球)	19 個	2.7 個
野手 (エラー)	12 個	1.7 個

図 2 の得点パターンをみると、2014 年と比べ得点パターンの比率はヒットが 52.0%、エラーが 38.0% とほぼ同様であった。また、失点パターンをみると、比率はヒットが 40% から 20% と半数に減り結果的に総失点数が 43 点減っている。これは表 2-2 から明らかなように、1 試合平均での四死球が 6.8 個から 2.9 個に減少し、エラーも 3.7 個から 1.7 個と半分以上減少していることで、無駄なランナーや自軍のミスでの失点が減なくなった。以上のことから、2015 年でチーム課題とした「1 - 0 で守り勝つチーム」が結果的に現れている。得点力は 2014 年と同様の中、失点数は 2014 年に比べ減少し、守り勝つチームの特徴が出ている。中でも、守るという点で 1 番重要となる投手成績の充実がある。加えて野手の 1 試合平均エラー数も昨年の 3.7 個から 1.7 個へと 2 個も減っていることが失点数減少に繋がったのではないだろうか。逆に得点パターンに関しては、ヒットでの得点パターンが多いため、得点に繋がる攻撃のバリエーションが少なく相手からしたら怖さがないと判断される。軟式野球の特性を生かした内野ゴロや叩きの得点パターンを増やせば、今まで以上の得点力になると推察される。

c) 2016年 春季リーグ (I 監督)

2016年春季リーグの得失点パターンを図3に、加えて表3-1と表3-2を示した。

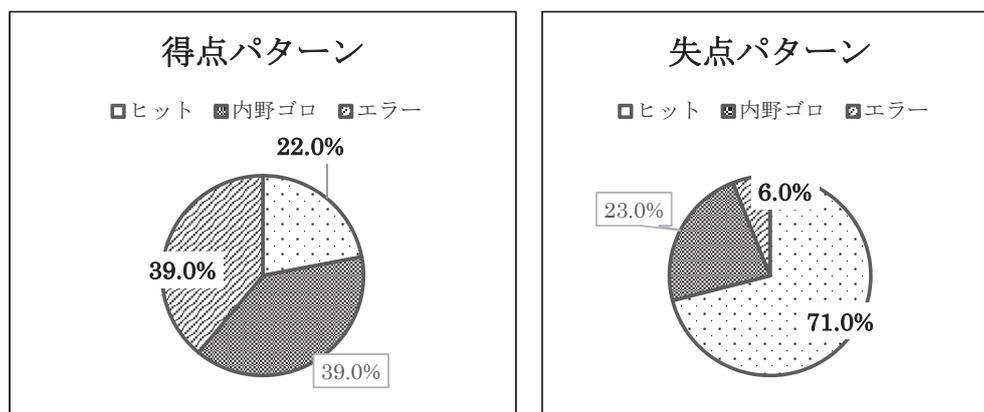


図3. 2016年春季リーグの得失点パターン (全10試合)

表3-1. 得失点要因の実数 (2016)

2016年	ヒット	内野ゴロ	エラー
得点	24本	14個	24個
失点	12本	4個	1個

表3-2. 投手・野手別の失点要因 (2016)

2016年 (10試合)	総数	1試合平均
投手 (四死球)	23個	2.3個
野手 (エラー)	9個	0.9個

図3の得点パターンをみると、過去2年間と比べグラフの割合が均等になっていることがわかる。2014年と比べても、試合数が少ないにもかかわらず得点数は2016年の方が14点多い。これは点が取れる場面で確実に点を取るチームになっていると推察される。

図3の失点パターンをみると、全体の71.0%がヒットによる失点であることから、自軍のミスでの失点が減ったと言える。この数字は表3-1をみてもわかるように、1試合平均エラー数が1個を切ったこと、1試合平均四死球数が、2014年の6.8個から2.3個に激減したことが総失点数を減少させた要因であった。

以上のことから、2016年でチーム課題とした守備を重視し、ノーヒットで点を取るという形が明確になった。また、内野ゴロでの得点(14点)は過去3年間で最多となっている。さらに守備重視で選手を起用しているため、1試合平均エラー数も過去3年間で最少の0.9個であった。

上記の得失点パターンにみられる結果は、各年のチーム課題に合わせた練習構成やチーム編成の現れであろう。そうしたチーム作り(チームマネジメント)が2016年のチームに合致し、東海リーグ優勝、そして全日本優勝という最高の形で結実したものと推察される。

5. 「生きる力」に着目して

ここでは、特別活動および部活動で培われた学生の「生きる力」に着目したい。関³⁾は、これまで部活動に関する諸問題に言及しながらも、「部活動に対する生徒の参加意識や活動意欲を引き出し、学校と地域の連携を強めるためにも、部活動に本来備わっているはずの基本的教育力、いわば部活力が今

こそ問われているのではないか」と問いかける。

本報告の対象学生らは高校時代、硬式野球部に所属していたが、大学では軟式野球を選択した。同じ野球でも硬式と軟式ではボールの素材が異なるため、戦術や練習内容の趣旨が変わると分析している。対象学生らは高校野球で築き上げた個々の経験値に加え、軟式野球で勝利するためには何が必要なのかと日々試行錯誤を繰り返し、学生間でフィードバックを繰り返しながら練習法を構築している。以下のコメント①、②、③は、K 監督のものである。

①高校では硬式野球部に所属し、「甲子園」という目標に向かって3年間頑張ってきた。高校では主将を経験し、結果へのこだわりもあったが、チームのモチベーションの維持をより意識してきた。大学では軟式野球部に入部したが、一人ひとりの意識が低く、勝つための練習というよりは、ただ野球を楽しくやっているサークルのような部活動だった。高校まで勝つために真剣に野球に打ち込んできたのに、勝てないチーム（野球）に物足りなさを感じていた。

②TG大学のチームカラーである楽しい野球は残していきたい、しかし負けることは悔しいという葛藤が続いた。2年次からチームの中心選手になったことで、今後のチーム方針について多くのことを話し合った。「野球を楽しみたい」と考える人たちと、「負けたら楽しくないから勝ちたい」と考える人たちの二極化した。

③当初は、双方に意見が別れ、お互いの意見を尊重することができなかった。その時にリーダー性のある主将が音頭を取り、チーム全体で出した答えが「日本一野球を楽しむチーム」であった。

ここで彼らがいう「楽しむ」とは、「ただふざけるのではなく、笑顔が絶えない雰囲気、一人ひとりが練習に真剣に取り組むことである」とする。さらに、「互いが仲間のために、相手のことを考えて優しい言葉や厳しい言葉をかけることができる人間関係を構築しよう」と取り組んできたという。上記のコメントからは、まさにスポーツコーチングの王道である「勝利哲学」で語られる。「勝つことがすべてではありません。勝利を目指して努力することがすべてなのです。」というレイナー・マーティンスの目指す方向に合致する⁷⁾。

練習場所と練習時間の確保について、軟式野球部は決して恵まれた環境にあるとは言えない。TG大学に野球場はあるものの、強化指定部である硬式野球部が大学野球場の使用権を独占している状態にある。そのため軟式野球部員は部費を徴収し、そこから地域の施設使用料を捻出している。従って、練習時間は極力短縮した上で、1分1秒を惜しんで効率よく練習内容を選択している。この練習の機会の確保についても、マーティンスのコーチングによれば、「選手が責任を担い自立することを手助けする」ことがコーチの重要な役割であるとする。しかし、多くのコーチ（指導者）は、練習や試合に関する決定をすべて行うだけでなく、選手を試合に望ましい状態にさせたり、困難を払いのけてやったり、お金のことも心配しなくていいようにするなど、生活のほとんどすべての面において支配することによって、選手が責任を担う機会をなくしてしまうとする⁸⁾。

特筆すべきことの一つとして、極めて日本的で部活動の指導の一環として、使用する「場」に対する感謝や敬意がある。野球でもテニスでも、試合場やコートに入場する際、日本の選手は当然のように一礼してから入場する。TG大学野球部員は練習前と終了後に使用した「球場」に対し、グラウンド整備と簡単な掃除やゴミ拾いを決まて行う。このとき、学生監督の一人が口にする。「さあ、運を拾おう！」我々が集めているのはゴミではない。ゴミを拾っているのではなく、運を拾っているのだと。

実践の場である試合では、チームメンバーの一人ひとりが、それぞれに与えられた役割を自覚し、それぞれの部員が勝つために全力でチームのために尽くすことを意識させたとする。試合が終わると、ベンチにいた選手が一斉に、真っ先にグラウンド整備に走る。その姿勢は観戦後の観客にとっても実に心地よい光景でもあった。

上記のような地道な練習と取り組みが、大会（試合）結果に少しずつ現れてきたことが、モチベーショ

ン向上にも繋がったと考察できる。2015年は春季、秋季ともにリーグ2位になり、秋季は2位通過で西日本大会出場。2016年の春季リーグで念願の優勝、そして夏には全国制覇に繋がった。また、この結果は、自分たちだけの努力だけではなく、多くの方の支えや応援があったからこそ達成できたという「感謝」の言葉が学生監督の口から発せられ、「今後も TG 大学軟式野球部は感謝の気持ちを持って「日本一楽しく」野球に打ち込んでいけるチームでありたい」と結論づけている。

上記に示された一つの成功体験による「部活動」を通じた人間関係の構築や社会性、人間性、つまり「生きる力」は一朝一夕に築かれるものではなく、まさにこれまでの中学校や高等学校の部活動を通して学び築かれてきたものと大学での学修の融合であろうと推察できる。学習指導要領に示された部活動としてのスポーツが「学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであること」が具現化されている。また特別活動（高校）の目標である「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」ことに合致した活動の一端であると言えるであろう。

「生きる力」に着目するならば、学習指導要領⁹⁾では、子どもたちの「生きる力」をよりいっそう育むことを目指すものとして、「生きる力」＝「知・徳・体のバランスのとれた力」とした上で、変化の激しいこれからの社会を生きるために、確かな学力、豊かな心、健やかな体の知・徳・体をバランスよく育てることが重要であるとされる。しかしながら、これまで一般的に「生きる力」で重視している、思考力・判断力・表現力等、学習意欲、学習習慣・生活習慣、自分への自信や自らの将来についての関心、体力などに課題があるとされ、平成20年答申において、思考力・判断力・表現力等を育むためには、以下のような学習活動が重要であり、このような活動を各教科等において行うことが不可欠であると提示された¹⁰⁾。

(1) 体験から感じ取ったことを表現する (2) 事実を正確に理解し伝達する (3) 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする (4) 情報を分析・評価し、論述する (5) 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する (6) 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

今回の改定でも引き続き強調されている「生きる力」について、「思考力」「判断力」「表現力」との関係で、対象学生らがこれまでどのようにしてこうした資質・能力を、主体的に学習に取り組む態度を養いながら、個性を生かし培ってきたのかについて、上記の(1)から(6)の項目に従って、次のように議論したい。

まず、(1)については、部活動の中で繰り返される体験（特にゲームでのパフォーマンス）に基づいて、常に自らが感じ取った感覚をチーム内で他のメンバーに表現し、チームとしての課題につなげる作業を繰り返し行ってきた。(3)では、チーム内で学生監督を選出し、監督が自ら解釈する練習内容やゲームでの意図を説明し、選手がその意図を解釈し活用する作業が繰り返し実行されている。(4)では、学生として卒業論文を作成することを通して、チームを分析・評価し、課題を論述する作業が丁寧に行われた。(5)では、各年度の学生監督選出において、チーム課題を設定しチーム構想を立てた上で練習を実践し、大会ごとの結果（データ）に基づいて、評価と改善がなされる活動がなされた。(6)については、彼らが部活動の中で常にミーティングを開き、チーム内で互いに話し合い、目的に沿った共通理解を図りながら、集団の考えを発展させてきた経緯と結果が本論文の内容に示されている。

以上の分析から、具体的にどのように「生きる力」が本研究の「部活動」によって育まれてきたのかがより明確になったのではないだろうか。

本研究は、対象学生であった軟式野球部員が3年間の大会結果や練習内容を卒業論文にまとめたものであり、この取り組みをデータ化して残すことによって、この結果が「まぐれ」として処理されるので

はなく、今後の後輩たちのチームマネジメントの参考となるよう考慮されたものである。ここに、「日本一野球を楽しむチーム」を伝承しようとする意図が汲み取れる。

対象学生からは、「学生のみで行う部活動だからこそ得られるものが多くあると思う。それは実際に活動している者にしか気づくことができないし、自分たちが伝えたものが答えだとは限らない。だからこそ一人ひとりがしっかりと考えて行動し、社会に出ても通用する人間になりたいし、後輩たちにもそうあってほしい」と。「この部活動の一番の魅力は考える力が付くこと。データからも明らかな通り練習メニューは各監督で異なり、チームカラーも各監督で異なる。一つのことが決まるまでにみんなで考え、話し合うという機会は指導者がいないからこそできることだと思う。それは社会に出れば会社の会議であり、自分の意見を言うというのは非常に大切になってくる。全てにおいて、社会に出る準備をするという目的でこの部活動は活動している。私自身この部活を続けたから今の私がいる。それくらい濃い4年間だった。私を変えたのは間違いなく今の環境である。」等のコメントが出され、関の言葉を用いれば「部活動力」、また特別活動および部活動で培われた学生の「生きる力」の躍動が明確に感じ取れる事例であると考えられる。

6. まとめ

学生が主体的に活動している TG 大学軟式野球部が3年間に渡り3名の学生監督の変遷とともにどのようなチーム課題を設定し、部活動に取り組んできたかを明らかにし、東海リーグ優勝の背景を探ることを本研究目的とした。さらに、この学生主体の部活動運営の成果が、高等学校までの「特別活動」或いは「部活動」で培われてきた「生きる力」と大学でのスポーツ科学の学修の融合であることを明確にした。結果は以下に示す通りであった。

- 1) 監督とチーム構成の変遷は、対象学年が上がるにつれ、チーム全体の部員数が増加した。この増加は、対象学生らがチームを改革し、目的を明確にして主体的に部活動運営を展開した結果、学生の部員としての継続モチベーションの維持に繋がったものと推察できる。
- 2) 監督別チーム課題と練習内容は、チーム全体の意識が変化するとともに、チームとして目的や目標、課題等を明確に定めることで、学生の練習への取り組み姿勢の変化やモチベーションの向上につながり、結果的にチーム成績の向上に繋がったと推察できる。
- 3) 得失点パターンは、チームスタイルである守備を重視し、ノーヒットで点を取るというチーム形態が明確になった。2016年にはヒットでの得点は過去3年間で最多となり、さらに守備重視で選手を起用しているため、1試合の平均エラー数も過去3年間で最少となった。

以上、チーム全体での意識改革や部活動としての共通の目的・目標の設定、学生監督と主将の連携によるチームマネジメントが功を奏し、春季リーグでの東海リーグ優勝、そして全国制覇という偉業を達成した。今後のチームの技術・戦術的課題は、エラー数を0にするために更なる守備力の向上や、エース投手だけでなくどの投手でも抑えられるチーム作りを意識する必要がある。

上記の対象学生の得難い成功体験から培われた「生きる力」に相当する思考力、判断力、表現力を活かして、知識・技能を活用する学習活動や課題探究型の学習、協働的な学びをデザインできる指導力、豊かな人間性や社会性とコミュニケーション力、同僚とチームで対応する力や連携・協働できる力などの総合的な人間力を身に付けた教師や社会人としての活躍が今後期待できるのではないだろうか。

<参考文献>

- 1) 運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議 (2013) : 「運動部活動の在り方に関する調査研

- 究報告書～一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して～」, (平成25年5月), p.2
- 2) 運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議 (2013): 「運動部活動の在り方に関する調査研究報告書～一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して～」, (平成25年5月), p.1
 - 3) 関喜比古 (2009): 問われている部活動の在り方～新学習指導要領における部活動の位置づけ～, 立法と調査, No.294, pp.51-59
 - 4) 文部科学省 (2008): 『中学校学習指導要領』, (平成20年3月), p.5
 - 5) 文部科学省 (2009): 『高等学校学習指導要領』, (平成21年3月), p.8
 - 6) 文部科学省 (2009): 『高等学校学習指導要領解説、特別活動編』, (平成21年7月), p.5
 - 7) Rainer Martins (1999): “Successful Coaching”, Coaching, Clinic (1999.1), 理想のコーチングを探るコーチング講座 2, p.56
 - 8) Rainer Martins (1999): “Successful Coaching”, Coaching, Clinic (1999.2), 理想のコーチングを探るコーチング講座 2, p.58
 - 9) 文部科学省: 学習指導要領「生きる力」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/ (検索日: 2017年9月20日)
 - 10) 文部科学省: 学習指導要領「生きる力(思考力・判断力・表現力)」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1300857.htm (検索日: 2017年9月20日)